九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

生月のかくれキリシタン研究

坂井，信生

https://doi.org/10.15017/2328510

出版情報：哲學年報. 49, pp.115-146, 1990-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

生月のかくれキリシタン研究

坂井信生

はじめに

本稿は長崎県生月における「かくれキリシタン」に関する調査報告である。

周知のように、かくれキリシタンは世界宗教史上まれにみる特異な宗教現象であり、カトリシズム、仏教、神道その他の民間信仰が幾重にも混在した一つの宗教体系の信徒群である。かって、宣教師によって伝達されたカトリシズムを日本の信徒が確実に受容するにいたる前に、宣教師は放逐され、多くの指導者は殉教の死をとげていった。したがって、こうした適切な指導者を欠く一般信徒、とくに農民信徒が、カトリシズムの本質と真理とを理解しないままに多神教的宗教的風土の只中におかれ、強硬なキリシタン弾圧に対処すべく仏教徒を装った結果、今日みることのできるような、カトリック的一神教のすがたをまったく喪失した特異な宗教体系の形成となったのである。(1)

明治初年カトリック教会による布教が再開され、多くの潜伏していたキリシタンが教会に復帰した。(2) しかしながら、その一部は頑固に教会復帰を拒絶し、父祖伝来のキリシタンとしてとどまったのである。この一群が今日「かくれキリシタン」(Hidden Christian, Crypto-Christian) と呼ばれる人々なのである。かれらは現在、九州でも長崎県下にのみ存在している。その分布はおよそ三つに分たれる。㈠生月および平戸の獅子、根獅子、飯良など、㈡出津、黒崎といった外海地方、そして㈢外海地方から移住した五島列島である。一九五九（昭和三四）年に古野清人氏はその著

『隠れキリシタン』において、かくれキリシタンの総人口をおよそ三万内外と推定し、「人口の自然増加を考慮しても、現在のキリシタンの信仰や行事が、このままでは質的に向上することも、また信徒数が減少こそすれ増加することもともに推測ができない」とのべている。[3] おそらく、今日においては過大に推定したとしても、一万を大きくこえることはないと思われる。

古野氏が、キリシタン信徒は減少こそすれ増加することは推測できない旨記しているように、その後も種々の機会にキリシタンの衰退が多く語られている。それでは、今日の実態はどうであるかというのが、本稿で明らかにしようとする一つの課題である。われわれが具体的な調査地として選択したのは生月である。生月においては、今日も依然として諸行事を行うなど明確な祭祀組織が機能しており、このことが他所に比して生月に数多くのキリシタンを温存してきているからである。そして、何よりもこの祭祀組織に関する古野氏の先行研究[4]が存し、時間軸での比較を可能にしているからである。まず、われわれはこの古野氏による調査結果との比較を試み、キリシタンの祭祀組織面での減少傾向を明らかにしよう。

ついで、かかる祭祀組織に所属する個々のキリシタンの宗教生活を観察するインデックスとして、お水授けおよびオラショ奉唱の二項をとりあげ、かれらの信仰の強弱の度合いを明らかにする。そして、このことを通して次世代に対する信仰の伝達、継承のすがた、つまりキリシタン信仰と実践の存続性の問題を考察してみよう。これが本稿の今一つの課題である。キリシタンの減少が、よくいわれるように外的な客観的状況に由来することがたしかに大であるとしても、キリシタン自体における内部からの弱体化も否定できない現実である。

われわれの生月調査はいまだ緒についた段階であるにすぎず、とくにキリシタンの将来についての性急な結論は慎むべきであろう。当然、今後の調査によってかれらの在り方のより正確な方向性を見出さなければならないが、ここでは中間報告的試論をのべることにしたい。

なお、本稿は庭野平和財団研究助成金による研究成果の一部である。とくに記して、同財団に感謝の意を表したい。

一、生月の概要(5)

生月島は約七〇〇メートルの辰の瀬戸（生月瀬戸）をへだてて、平戸市の西北に位置する南北一〇・三キロ、幅は東西の最も広い南端部で三・五キロ、面積一六・五二キロの細長い島である。平戸市の薄香港からフェリーで、左手にキリシタン殉教の聖地である中江ノ島を望みながら、四〇分ほどで生月の一部港に着く。島の中央部には標高二八六メートルの番岳がそびえ、東側の傾斜地から海岸線にかけて段状の水田と集落がみられ、西側は断崖となって海に落ちている無住地域である。番岳周辺は、今日、肉牛の放牧地として活用されている。

近世末までは、この番岳を境

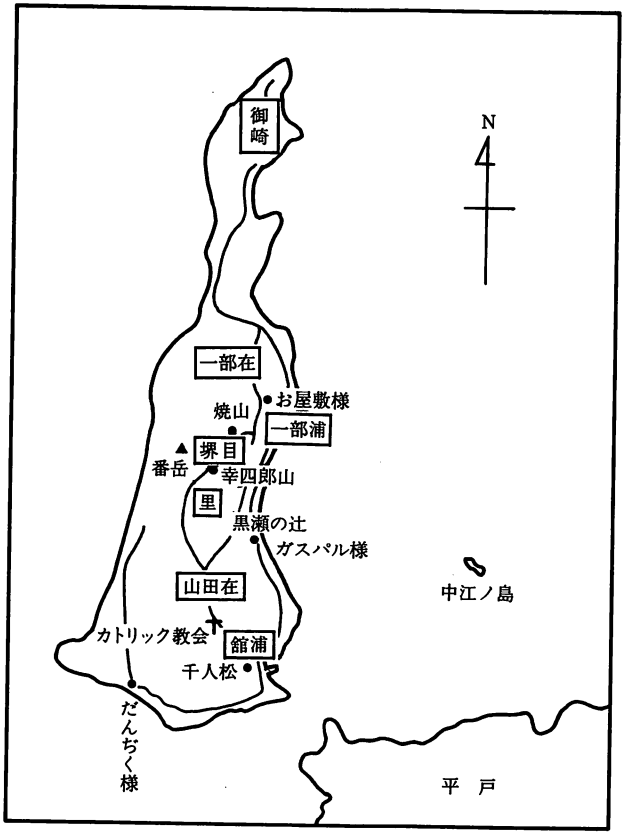


図1　生月島略図

にして北部は生属（一部―壱部とも記す）、南部は山田とに分たれていたが、一八八九（明治二二）年生月、山田の両村が合併して明治行政村としての生月村が誕生、一九四〇（昭和一五）年町制を施行して一島一町の長崎県北松浦郡生月町の形成をみた。集落は農業集落としての「在」と漁業集落としての「浦」とに区分される。一部は一部在といわれる森・大久保・岳崎など、さらに南の堺目、辻・上川・木場などの里（元触）および一部浦からなっている。山田は山田・正和・日草などの在と舘浦からなる。これらの集落のほかに、島の北端に御崎がある。一部、堺目、元触などからの移住者による集落を形成し、農業主体の半農半漁の生活を営んでいる。今日のかくれキリシタンのほとんどは、一部在、堺目、里（元触）、山田などといった農業集落の在に多く分布している。

一九八八（昭和六三）年現在、生月町の人口は九、四一〇人（うち男四、五八二、女四、八二八）、世帯数は二、四七八である。一九六〇（昭和三五）年度の人口は一一、五〇六であり、その間の日本経済の高度成長にともなう人口の都市集中化と農漁村部の過疎化の影響を受けて若干漸減の傾向にあるとはいえ、さほど大きな人口の減少がみられるわけではない。生月における産業構造は表1に示した通りであるが、この表からも明らかなように、生月では漁業および建設業がいたって盛んであり、多くの就業人口をかかえているのである。とりわけ、舘浦漁港を基地とする遠洋漁船が中心の大・中型まき網は堅調で、その水揚げ額は年間一五〇億円にも達しており、一、五〇〇人前後の就労を可能にしている。同じく建設業も上昇傾向にあり、現在架橋中の生月大橋およびその付帯道路と島内周遊道路工事、あるいは長崎県内外の土木工事は多くの島民に就労の機会を提供しているのである。

他方、農業就労者の減少はここ生月でも例外ではなく、一九六〇（昭和三五）年の農業就労人口一、五一五人から、一九八六（昭和六一）年のそれは八七五人と約半数に激減している。もちろん、生月においても専業農家は決して多くなく、ほとんどが兼業であり、しかも大部分が第二種兼業なのである（表2参照）。兼業農家のかなりの部分は漁業や建設業に従事しており、この事実はのちにのべる生月キリシタンの動向と必ずしも無関係ではないと思われる。

産業種別＼年次(昭和)	35			60		
	計	男	女	計	男	女
第1次産業						
農業	1,515	586	929	610	209	401
林業	4	4				
漁業	1,608	1,584	24	1,500	1,461	39
計	3,127	2,174	953	2,110	1,670	440
第2次産業						
鉱業	2	2				
建設業	415	377	38	578	453	122
製造業	341	77	264	229	74	155
計	758	456	302	807	527	280
第3次産業						
卸売・小売業	415	139	276	416	110	306
金融・保険・不動産業	25	17	8	39	12	27
運輸・通信業	122	98	24	223	199	24
電気・ガス・水道業	5	5		3	2	1
サービス業	422	221	201	499	235	264
公務	70	54	16	97	73	24
分類不能の産業	1		1	2	2	
計	1,060	534	526	1,279	633	646
合計	4,945	3,164	1,781	4,196	2,830	1,366
15歳以上人口	7,312	3,576	3,736	7,165	3,473	3,692
総人口	11,506	5,748	5,758	9,323	4,543	4,780

表1　生月町産業別就業人口

区分＼年次(昭和)	農家数				農家人口			
	総数	専業	兼業		総数	農業従事者数		
			第1種	第2種		計	男	女
55	528	25	116	387	2,664	933	225	678
60	513	38	72	403	2,423	875	239	636

表2　生月町農家数、人口、従事者数　(農業センサス　単位：戸・人)

キリシタンには農業関係者が多いからである。生月農業の主要生産物は米が主体であり、とくに近年「こしひかり」の早期作付が奨励されている。そのほか、麦類、甘藷、馬鈴薯それに肉用牛の肥育が盛んに行なわれている。

二、生月キリシタン略史

今日の生月におけるかくれキリシタンを理解するために、その背景となる生月キリシタン史のあらましを、当時の文献を中心に再構成しておきたい。

生月が属する平戸松浦氏領内のキリシタン史は、イエズス会のフランシスコ・ザビエルの平戸来訪にはじまる。一五四九（天文一八）年鹿児島に上陸したザビエルは、翌年ポルトガル船の平戸入港の報に接して平戸を訪れた。鹿児島に帰ったかれは京都への途上、再度平戸を訪ね、ポルトガル人との交易を熱望していた領主松浦隆信の盛大な歓迎をうけ、二ヶ月ほどの滞在中に約一〇〇名の者に洗礼を授けている。[6] その後も宣教師は平戸を中心に領内の布教につとめ、多数の信徒を得るにいたっているが、その中には「三人の身分の高き武士」がふくまれていた。その中の二人は松浦氏の親戚かつ重臣で生月の領主、籠手田安経（ドン・アントニオ）と一部勘解由（ドン・ジョアン）の兄弟である。[7] とくに、籠手田安経は自ら宣教師とともに島内の各地を布教して廻り、その結果、一五五九（永禄二）年には「この領主はパードレの勧に従ひいまだ教徒たらざる農民および家臣等ならびに自己の家族一同をキリシタンとなせり。教徒の数は総計千五百内外なり。彼はパードレとともに村々に行きて説教し帰依を勧め、寺院より偶像を取出して会堂となし、また所々に死者のための墓地を造り大なる十字架を建てたり」との報告が記されている。[8]

さらに、生月布教に足跡を残したアルメイダによる、一五六一（永禄四）年の報告は次のようにのべる。[9]「この島の人々は二千五百にして、八百人は教徒なるべし。予が陸地に着するや、多数の人々待ち受けゐたり。……諸人は甚だ親切に予を迎へ、その習慣に従ひ、行きて十字架を拝したる後会堂に赴けり。堂は甚だ大にして美しく、かつ甚だ

整頓し、見る者をして喜ばしめたり。その後実査したるところによれば、この建物には六百人余を容るべし」と。この会堂でアルメイダは朝夕説教をなし、子供たちにドチリナを教えている。また、一五六三（永禄六）年の正月に大きな十字架が生月において建立されたとの報告も見出される。[10]「生月において建てたるもののうち最も美麗なるものにして、大なる賑をもって会堂より同所まで一レグワの約四分の一の間行列をなしたり。行列には一千内外のキリシタン参加し、皆花環を携へ、ポルトガル人数人踊りて前に進めり」と。この巨大な十字架は、「クルスの辻」がなまって「黒瀬の辻」と今日呼ばれている高台に建っていたという。

この前後数十年が生月キリシタンの最盛期である。パードレの来島時には朝夕説教を聴き、聖体を拝領した。昼間には女性が、夜には男性が告解をなし、「生月には十歳以上の男女で告白しない者は誰もいなくなったほど」であった。また、かれらは「驚ろくべき熱心さと涙とをもって聖体を拝領し、かれらが聖体を拝領する前の夜、教会の中だけでなくその付近でも十字架の前で行っていたのは、皆それによって信心を強めたほどたくさんの鞭打ちの苦業であった」ともいう。[11]

アルメイダが一五六一年「この島の人々は二千五百にして、八百人は教徒なるべし」と記していることは前に引用した。それが一五八一（天正九）年度のイエズス会報告では、「平戸の地はわが教の大敵である異教徒の領主〔松浦鎮信〕の所領であって、彼の臣下であり、また親戚であるキリシタンの大身数人の島々〔生月、度島等〕に在る約四千のキリシタンの告白を聴き、これを教化するほかにない。このカザにはパードレ二人がカザの諸儀式を助け行ふ日本人数人と共に駐在し、イルマン等のノビシヤドを修了することを待っている」（傍点筆者）とその盛況ぶりを伝えている。[12]四千のキリシタンとは生月、度島のみならず、平戸領内の春日、獅子、根獅子、飯良など当時の文献に散見されるキリシタン集落の総人口に匹敵する数である。田北耕也氏は「このことから推して生月に二千五百乃至三千の信徒が居った」と推定している。[13]この数字は生月の全人口に近く、島民のほとんどがキリシタン信徒であったといって

も差支えないであろう。

しかしながら、生月キリシタンの盛況もほどなく終焉の日を迎えなければならなかった。積極的にキリシタン布教に努めた生月領主アントニオ籠手田安経が一五八二（天正一〇）年に急死した。その子ドン・ジェロニモ安一は父の遺志を継いで信仰に熱心であり、宣教師を厚遇したのであった。[14] ところが、一五八七（天正一五）年突如として、豊臣秀吉が博多において「日本は神国たる処」ではじまる有名な『伴天連追放令』を発布した。さらに、フロイスが「この地〔平戸の港およびこれに属する数箇の島〕の殿は異教徒で、デウスの教の大敵」と記しているように、[15] 熱心な仏教徒であった領主松浦鎮信は、政治上のバランスから公然たるキリシタン迫害を避けていた父隆信の一五九九（慶長四）年の死を機会に、松浦一族と家臣の中のすべてのキリシタンの改宗棄教を強要したのである。「恐ろしい危険な嵐が平戸で起った。平戸の老侯〔松浦隆信〕が死んで、その子で異教徒でありすでに国を治めていた法印〔鎮信〕が、……ドン・ジロラモ〔籠手田安一〕とその子ドン・トマッソ〔清二〕及び親族・家臣の他平戸のキリシタン一同に、キリストを棄てることを命じ、領内にはキリシタンを一人も残さない決心をしたことを伝えた。地獄の敵（悪魔）は日本で最も古いキリシタン団の破滅のために武装した」とバリニヤーノは報告している。[16]

その結果、籠手田安一をはじめとする籠手田、一部の両氏は同年所領も地位も一切を放棄して、その信仰を守るべく生月信徒六百余名とともに生月を去り、長崎へ向かったのである。かれらには「長崎では治外法権の町から四半リュー離れた所にある往時の学林内と、大村の領内とに避難所を宛てがはれ」たという。[17] 籠手田氏の家臣として生月島の統治に当っていたガスパル西玄可もその治権を剝奪され、棄教を強要されたが応ずることなく、一六〇九（慶長一四）年妻子とともに殉教の死をとげた。[18] 今日、黒瀬の辻にあるかれらの墓地は、「ガスパル様」の名でキリシタンの聖地として崇められている。

かくして、生月キリシタンの歴史は、かれらの信仰の擁護者を次々と失い、一転して殉教の歴史となるのである。

レオン・パジェスは次のように語っている。一六二二（元和八）年には、その前年潜入して平戸およびその周辺の島々でキリシタンの指導に当り、田平で殉教した宣教師コンスタンツオの宿主であったヨハネ・テンカモト・ザエモン（坂本左衛門）と島々に渡るための舟の寄付者ダミヤン・イスライ・インデグチ（出口）、それにジロエモン（次郎右衛門）が中江ノ島で、ヨハネ・ヤニヌラ（雪ノ浦次郎衛門か）、パウロ・ツカモト（塚本）そしてイエズス会修士アウグスチノ・オタ（太田）が生月で殉教した、と。[19] さらに、一六二四（寛永元）年にはヨハネ・サカモトおよびダミヤン・出口の両家族が、「只管将軍の寵を欲し、何より所領の安堵を望んでゐた松浦肥前殿（鎮信）」の迫害によって、同じく中江ノ島で殉教したことを伝えている。[20] パジェスによる生月の殉教記録は、この年を最後に跡絶えているが、迫害がこれで終熄したわけではない。

これらキリシタンの多くが殉教の死をとげた中江ノ島は、今日「お中江様」と呼ばれるキリシタンの聖地である。[21] 洗礼、もどしあるいは正月の「家払い」などに用いられる聖水は、この中江ノ島から汲みとってくるのである。そのほか、生月には殉教者と関連する多くの聖地が存在している。

一部の「お屋敷山」は、前述の松浦鎮信の弾圧を避けてジェロニモ籠手田安一らとともに長崎に退去したジョアン一部勘解由とその子バルタザルの屋敷跡である。この山では迫害時代に一〇〇人以上の信徒が殺害されたと伝えられている。とりわけ、一部在のキリシタンにとりこの山の木の伐採は禁じられており、「六ヶ所寄り」（四月中旬）や「お屋敷様」（旧八月二九日）の行事が行なわれる聖地である。堺目の「アントウ様」は殉教者アントニオ庄平の遺骸を葬った場所と伝えている。同じく堺目の「幸四郎山」は「サン・パブロー様」とも呼ばれ、この山に入って薪を取ると病気になる、古い草履をはいて入ってはいけない、などの伝承がある。生月の最南西部の岩崖の下、暖竹の生茂ったところにある「ダンジク様」は、迫害を逃れて五島方面に脱出を計っていた弥市兵衛と妻マリア、その子ジョアンの三殉教者を祀っている。かれらがこの暖竹の中に隠れていた際、ジョアンが泣いたのを舟上の役人に発見され

て殺されたという。したがってキリシタンたちはこの地に海上からは決して行かないし、舟を着けると大風大波が起こるという。[22] 島原の乱後、平戸藩は強硬な弾圧策を講じ、一六四五（正保二）年に疑わしきキリシタン家族全員を殺害したと伝えられているが、山田の「千人松」はこの多数の殉教者の遺骸を埋葬した場所である。舘浦の「八体様」は七人の殉教者の中の一人が妊娠していたので「八体様」だといい、今日では安産の神として知られている。

ともかく、このように生月に殉教者と関連する聖地が多く存している事実は、この地においてきわめてきびしい詮索と弾圧が続き、多くの殉教者の鮮血が流されたことを物語っているといえよう。

かくて、生月のキリシタンは寺請制度の施行もあり、宣教師をはじめとする指導者を欠いたまま、表面的には仏教徒を装いながら、キリシタン信仰と行事の保持に努めたのである。かれらの大部分は里免にある禅宗竹鞭山永光寺の檀家であり、若干が舘浦の天台宗妙法院に属している。また、生月に祭祀されている住吉神社、白山神社、比売神社の氏子でもある。その結果が、今日いわれているような、キリスト教（カトリシズム）、仏教、神道、民間信仰などの混在するシンクレティズムを特徴とする、いわゆる「キリシタニズム」[23] として展開しているのである。

三、祭祀組織

前項でのべたように、相続く迫害と弾圧の中にもはや宣教師による指導が期待できないとすれば、潜伏状態におかれたキリシタンは自らの手で信仰と行事を維持していくよりほかに道はなかった。かくして、キリシタン独自の祭祀組織がやがて形成され、ともかくもその信仰と行事の体系が持続されることになったのである。つまり、一般信徒の上に立つ宗教的役職者が、宣教師、イルマンあるいは同宿に代る指導的存在として登場することになる。そして、これらの役職者に指導された祭祀組織が、今日のかくれキリシタンの存続に大きな機能を果してきているのである。現在においても、その組織機能は充分に作動しているのであろうか。

生月においては、大字に相当する地区を「免」と、小字に当る集落を「触」と呼んでいるが、今日、キリシタンの祭祀組織が存続しているのは、一部在、堺目、里、山田の四つの免である。この祭祀組織は免＝触という地縁的社会構造の上に成立しており、各免には数名の「お授け役」が、そしてその下部構造である各触に「つもと」が存在する。さらに、その下部には平均五戸からなる「組」（コンパンヤ）がある。組を代表する者を「み弟子」または「組親」という（図2参照）。

生月キリシタンの祭祀組織において最高の地位を占めるのは「お授け役」であり、通称「おじさま」と呼ばれる。その任務は名称の示す通り洗礼（お水授け）を授けること、および葬儀に際して「もどし」という行事を執行することである。「もどし」とは故人が現世でおかした罪過を清めて、霊魂の故郷である天のパライゾにもどす葬送の儀式である。[24] かくて、お授け役はつねに心身を清く保たなければならず、数多くのタブーにとりかこまれている。

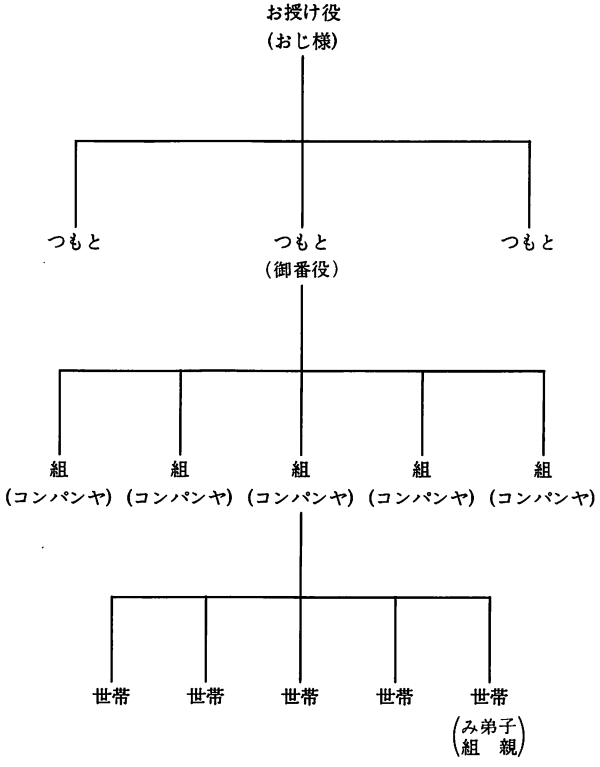
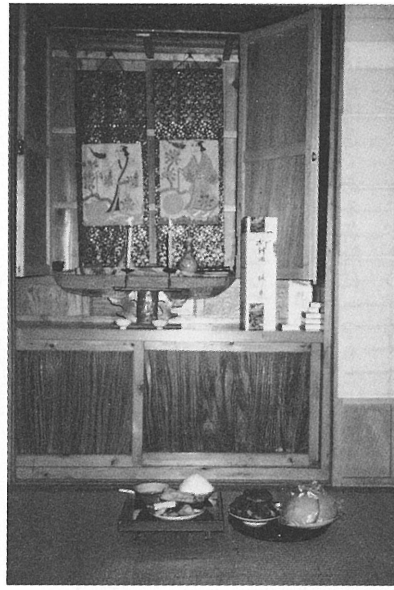
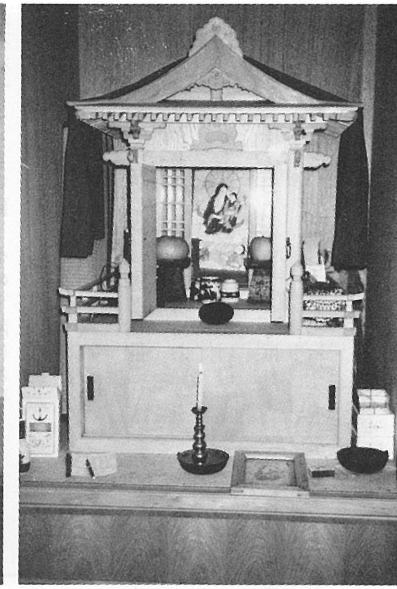


図2　生月キリシタン祭祀組織



納戸神（一部在）



納戸神（山田）

お堂内部（堺目）

お　堂　（堺目）

「つもと」（しばしば「津元」の字が当てられる）[25]は生月に特徴的ともいわれる「納戸神」、かれらの用語での「お神様」「御前様」を保管安置している家であり、その戸主を「お番役」または「親父様」という。納戸神とはかっての潜伏期に秘密を守るべく納戸に隠された祭祀対象であり、聖画（肉筆画掛軸－中には明治以降にカトリック宣教師が持込んだと思われる聖画もある）、鋳像、メタル等々、それにかっては鞭打ちに用い今では呪術的用具となっているオテンペンシヤなどの遺物がふくまれている。この納戸神を保管するつもとは、一部在および堺目では世襲制であり、今日、堺目および里の上川にはお堂が建立されて祀られている。里と山田にあっては三年ないし五年の輪番制である。御番役が統轄する世帯は「垣内（かけうち）」と呼ばれている。

つもとに所属する下部組織として「組」（コンパンヤ）がある。コンパンヤはポルトガル語の companhia に由来するという。[26]組の代表者が「み弟子」であり、つもと行事に組を代表して参加するし、組の行事たとえば「お札」を預り、その会を定期的に主宰しなけれ

ばならない。

こうしたキリシタンの祭祀組織は、かっては長崎県下のかくれキリシタン集落にひろくみられたと想定されている。しかしながら、今日そのほとんどは完全に消滅してしまっており、明確なすがたをとどめているのは生月のみである。とはいえ、生月におけるこの組織もかなりの減退を強いられてきているのである。とくに近年、このキリシタン組織の衰微が語られているが、その実態はどうなのであろうか。まず、われわれはこの問題から述べることにしよう。

生月におけるキリシタン組織をはじめて明らかにしたのは田北耕也氏である。その著『昭和時代の潜伏キリシタン』において、「生月におけるこの宗団組織を一覧表にし、昭和某年の役職者を揚げるが、考える所があって、年代を示さない」と年代表記を断っているが、おそらく昭和初期かと推定される。この一覧表によれば、生月全体でお授け役一一、御番役二四、組一〇五、組所属世帯五七〇である。[27]

田北氏の調査が昭和初年であるとすれば、それよりおよそ三〇年を経た一九五六（昭和三一）年に古野清人氏が詳細な調査を試みている。この古野調査によると、お授け役一一、御番役二二、組八一、所属世帯四三七である。田北調査と比較すれば、お授け役、御番役はともにほとんど変化をみないものの、組および所属世帯数においては、それぞれ七七・一四％、七五・九六％の存続率であり、およそ四分の三に減少しているのである。[28]

古野氏の調査からさらに三〇年を経過した今日のすがたを明らかにするために、われわれは古野調査の今日版の作成を試みたのである。この三〇年間の日本においては高度経済成長が大きく展開し、とりわけ農漁村あるいは離島からの都市移動が激化、農漁村の過疎化が急速に進行した変動の時期である。さらには、近年若年層の既成宗教に対する関心がとみに減退していることも伝えられている。こうした状況下における今日（一九八八年）の生月における実態は次のごとくである。

お授け役八、御番役一九、組六七、組所属キリシタン世帯三一〇であり、存続率は古野調査と比較して、組八二・

	お授け役	つもと（御番役）	組	世帯	備考
一部在	大岡　留一	平田　義雄	5（7）	25（33）	びやの首
		川崎　雅市	5（5）	25（32）	大久保・種子
		小川　政治	1（1）	3（3）	ぜんじや
		大岡　留一	7（7）	40（50）	岳の下
		増山　隼吉	2（2）	10（11）	居　場
			計20（22）	103（129）	
堺　目	船原　久敏	末永　武男	8（19）	35（112）	上宿・中宿
		鳥山　泰隆			・下宿
		（お　堂）			準会員　49
山　田	吉永　始雄	小楠　肇	2（2）	12（12）	山田在
		村川　要一	2（1）	7（8）	
		糸平　堅重	3（4）	13（14）	
		石原　則雄	1（1）	7（7）	
	百板　忠男	吉川　作市	2（2）	4（4）	日　草
		船原　博司	3（3）	7（7）	
		川渕　正雄	1（1）	3（4）	
	村尾　律雄	出口須奈生	3（3）	9（10）	正　和
		橋ノ上　巌	3（3）	9（9）	
		植松　栄	2（3）	8（9）	
			計22（23）	79（84）	
里	岳本　利広	長田　正敏	7（7）	37（50）	辻
	門田　幸雄	田渕　英一	6（6）	39（40）	木　場
	田渕　善一	（お堂）	4（4）	17（22）	上　川
			計17（17）	93（112）	
総　計	8（11）	19（22）	67（81）	310（433）	生　月

表3　生月キリシタンの祭祀組織（1988年度）（　）内は古野調査

七二％、所属世帯七〇・九四％を示している。もっとも堺目では組織形態に若干の変更がみられ、組には属さないがつもとに会費を支払っているいわば準会員世帯四九がある。これをもふくめると、生月のキリシタン世帯合計は三五九となり、八二・一五％の存続率である。今日の組織の状況を表に示したのが表3である。

この表について若干の説明を加えておこう。

一部在においては、かってはお授け役は二名であったが、現在は一名である。その各集落（触）にはそれぞれ世襲制のつもと（御番役）が存し、古野調査時からみた組および所属世帯の存続率は九〇・九一％と七九・八四％である。山田では各触ごとにお授け役がおり、その下に数ヶ所のつもとが存している。組および所属世帯の存続率は九五・六五％と九四・〇五％と、生月四地区の中で最も高い存続率を示している。里においては、辻、木場の触に輪番制のお授け役とつもとがあり、上川のみはお堂である。組の存続率は一〇〇％であるが、所属世帯は八三・〇四％となっている。堺目は上宿、中宿、下宿の三つに区分され、それぞれにつもとと一九の組が存していた。しかし、組が減少し経済的に無理がくるとの理由で、一九八三（昭和五八）年に三つのつもとが合併、かっての教会跡と伝えられている焼山にお堂を建立し、そこに納戸神を祀っている。現在堺目には八組が存し、その所属世帯は三五で存続率は四二・一一％と三一・二五％ときわめて低い数値となっている。しかし、前述の準会員世帯をふくめると七五％の存続率となる。幾分かの近代化を目指した変革が、むしろ組織の弱体化を招致しているといえようか。

さらに、生月にはキリシタン集落としての御崎がある。島の北端のこの地は一部在、堺目、里からの移住者からなり、それぞれ一部なわり、堺目なわり、里（元触）なわりと呼ばれている。古野調査時の一九五六（昭和三一）年に、御崎には一部系の組二、一三世帯、堺目系の組四、三三世帯と六つの組が構成され、里系の世帯は里の組に所属していることが報告されている。[29] しかしながら、今日では御崎独自の組はすべて解散し、それぞれの出身地区の組の所属となっている。

このように、生月キリシタンの祭祀組織は免（大字）－触（小字）という地縁社会構造を基盤にして、納戸神・御前様という宗教的シンボル群を中核に組織されているのである。そして、お授け役、御番役などの役職者（役中）、組（コンパンヤ）、その所属世帯数において、三〇年以前の古野清人氏の調査時と比較しておよそ二〇％前後の減少がみられるとはいえ、今日も依然としてかなり強固な組織率を維持しながら機能しているということができよう。

四、洗礼とオラショ

前項で明らかにしたように、生月キリシタンをお授け役－御番役－組（コンパンヤ）という祭祀組織の局面から観察する限り、かれらについて一般に語られているほどの大きな減退を示しているわけではない。そこで、このキリシタン社会における各個人の宗教生活にかかわる局面でのインデックスとして、お水授け（洗礼）とオラショの奉唱をとりあげて、キリシタンの信仰の度合い、そしてそれを通して存続性の問題をさらに考察していきたい。

お水授け、洗礼がキリシタン伝来の当初より、きわめて重要かつ不可欠の通過儀礼であったことは多言を要しないであろう。今日においても、お水授けの儀式を司ることができる唯一の役職者「お水授け」（おじさま）は、依然としてこの社会の最高の権威をあたえられ、最高の尊敬を享受している。また、お水授けに際して用いられる聖水サン・ジワン様は、かれらの父祖の殉教地中江ノ島から汲みとって来なければならないのである。しかしながら、このお水授けの実態に関する先行研究を見出しえないために、残念ながら過去のそれとの比較を試みることは不可能である。ただし、古老のいう「かっては一〇歳、おそくとも一五歳までにはほとんどの者がお水授けをうけた」との言葉は参考になるであろう。[30]

生月キリシタンの組（コンパンヤ）所属世帯三一〇の戸主の受洗状況は、地区（免）により若干の差異がみられるものの、全体で二五一名（八〇・一〇％）がお水授けをうけている。その中でも、里免では戸主九三名全員が受洗し

ており、まさに一〇〇％の受洗率である。一部在でも一〇三名のうち九五名（九二・二三％）の高率を示している。しかし、組および所属世帯の存続率で最高値を示した山田では七九名中三三名（四〇・五一％）とかなり低く、み弟子のなかにも未受洗者がふくまれている。組織を変更した堺目では、組所属世帯戸主三五名のうち三〇名（八五・七一％）が受洗、準会員にあっては四九名中二一名（四二・八六％）とやはり低いすがたである。かくて、地区により差異がみられはするが、生月キリシタン全体をみる限り、祭祀組織の場合と同じく、戸主の受洗率はかなりの高さを示しているといってよいであろう。ここで注目すべきは、約六〇を数える未受洗世帯といえども組の構成員たりうること、さらにはすでに山田で数例がみられるように、未受洗者であってもみ弟子として認知されていることである。この点についてはのちに再びふれることにする。

しかしながら、組所属世帯戸主の受洗に関しては高率を示しているとはいえ、その家族の受洗状況に目を転ずると事情はいちじるしく異なってくる。一部在の事例をのべてみよう（表4参照。夫または妻がすでに死亡している場合には、その時点での受洗の有無により算出した）。

それによれば、夫婦ともに受洗しているのは一〇三世帯のうち六二世帯で、全体の六〇・一九％にすぎない。つまり、夫か妻のいずれか（夫の方が多数）というのが四〇％ほどある、ということである。さらにこれを戸

受洗者／戸主年齢	夫婦と子供	夫　婦	夫のみ	妻のみ	受洗世帯計	無受洗世帯	世帯数
80以上	3	0	0	0	3	0	3
70～79	4	7	2	0	13	0	13
60～69	4	22	2	0	28	0	28
50～59	0	15	7	0	22	2	24
40～49	0	6	10	1	17	0	17
30～39	0	1	10	1	12	6	18
計	11	51	31	2	95	8	103

表4　組所属家族の受洗状況　（一部在）

主の年齢別にみると、八〇歳代では三組全部、七〇歳代で一三組中一一組（八四・六二％）、六〇歳代二八組中二六組（九二・八六％）と、夫婦の受洗は高齢者ほど高い比率である。これと対比的に、年齢が下降するにしたがい、五〇歳代二四組中一五組（六二・五％）、四〇歳代一七組中六組（三五・二九％）、三〇歳代になると一八組中わずかに一組（五。五六％）といったきわめて低い数値を示すようになるのである。堺目においては、組所属世帯三五中一二組（三四・二九％）が夫婦ともに受洗しているにすぎず、すべてが五〇歳以上である。準会員にあっては四九組中わずか四組（八・一六％）を数えるのみである。

これらの数値が明確に示しているように、キリシタンの伝統において重要かつ不可欠の通過儀礼であるお水授けをうけている夫婦が、組に所属しているにもかかわらず、一部在で六〇％、堺目では三四％であり、それも高齢者に多く年齢が下るにつれて低くなっている。この事実はキリシタン信仰の次世代への伝達、継承の問題に大きな危惧の念をいだかせるといえるであろう。

このキリシタン信仰の強度そして次世代への伝達、継承問題は、それと直接的なかかわりをもつと思われる子供の受洗状況をみることで一層明らかとなるのである（表4参照）。すでにのべたように、現在役職に就いている六〇歳をこえたキリシタンの語るところによれば、かられの子供の頃には一〇歳から一五歳までには、ほとんどの者がお水授けをうけたという。そして、かれらの洗礼時に「へこ親」（「抱き親」）になってくれた人物に対しては、盆正月の挨拶は欠かしたことがないともいう。一〇三世帯を擁する一部在の場合、夫婦そして最低一名でも子供が受洗している事例はわずかに一一世帯（一〇・六八％）をみるにすぎない。それも親夫婦の年齢別では、八〇歳代で三、七〇歳代で四、六〇歳代で四とすべて六〇歳以上である。五〇歳代以下の場合、たとえ両親ともに受洗していたとしても、子供はまだ受洗していない（あるいは受洗しない）、ということである。もちろん、夫または妻のみの受洗世帯では子供の受洗は皆無である。今日、お水授けが稀に行なわれることもあるが、その場合は二、三〇歳になってからであ

るという。

具体的な事例として、役職にある二者の例を記しておこう。現在お授け役で世襲制の御番役でもあるO氏（七一歳）は、その子供三名のうち、長男は海難事故死、受洗している次男は漁船員で不在が多いため、三男M氏（二九歳）を後継者として先年お水授けをしたという。他方、輪番制のお授け役M氏（六四歳）の場合、曽祖父、祖父、父と代々お授け役や御番役という役中を勤めた家系でありながらも、その子供二男二女のいずれにもお水授けをうけさせていない。長男、長女、二女は未受洗のまますでに他県に転出しており、二男I氏（二二歳）のみが生月に残ってはいるが、「船員だし、キリシタンにはまったく興味がない」と断言する。このお授け役ですらあるM氏の事例は、生月キリシタンにおいて特殊な例ではなく、むしろ一般的であるといえそうである。

キリシタン信仰の強度と伝達、継承に関する今一つのインデックスは、オラショ（御誦）をめぐってである。オラショはかくれキリシタンの諸行事、儀礼には欠くことのできない最も中核的部分であり、本来的には、すべての男性メンバーは諳んじて奉唱することができなくてはならない。よく知られているように、オラショはラテン文そのままのものや慶長年間に翻訳されたものがふくまれている。しかも、それらが口伝であるためにかなり訛っており、今日その文意を理解することは不可能に近い難解な祈禱文である。そのためか、かれらはオラショを「もんじゃもんじゃ」ともいう。したがって、全部奉唱するのに四、五〇分を要するオラショを暗記するには、相当の努力と忍耐が必須であるし、何よりも確固たるキリシタン信仰がその基盤になくてはならないであろう。

一部在をみた場合、組所属世帯の男性戸主九六名のうち、完全にオラショを奉唱できるのは三一名（三二・二九％）で三分の一であるにすぎない。お水授けの場合と同じく、オラショも高齢者ほど奉唱でき、八〇歳以上の三名はすべて、七〇歳代一二名中一〇名（八二・三三％）は完全に奉唱することができる。これに比して、六〇歳代二七名中一〇名（三七・〇九％）、五〇歳代二二名中七名（三一・八二％）と激減し、四〇歳代になれば一六名中ただ一

名（六・二五％）と極端に低くなっている。

堺目においてもほぼ同様の傾向がみられ、組所属の男性戸主三四名のうち、オラショ奉唱可能な者は一〇名（二九・四一％）、すべて五〇歳以上である。もちろん、準会員では二名にすぎない。ただし、堺目の場合、オラショ全部ではなく、「ロッカン」（「クロス」「万事かなひ給い」「御体巻き」「キリアメマリヤ」「ケレンド」「パライゾー」の六つのオラショからなる）を奉唱できる者は一五名、準会員のなかにも一〇名ほどいる。最近の山田ではオラショを書き写したノートを見ながら奉唱する、という方式を採用するなど伝統と異なった動きをも見ることができる。

いずれにしろ、オラショを完全に奉唱できる者はいたって減少し、しかも高齢者に限定されつつある、というのがいつわらざる現実といってもよい。古老によれば、近年若年層の間に幾らかオラショを習うという気運が生じてきているという。しかるに、このことはキリシタン信仰の復興のゆえというより、最近テレビなどでオラショ奉唱風景がクローズ・アップされてきていることと無関係ではないと思われる。事実、生月にはオラショ保存会というグループすら結成されているのである。[31]

五、年中行事と信仰内容

次に、生月のキリシタン祭祀組織において実践されている主要な年中行事を記しておこう。年中行事は地区によって若干の異動が観察される。しかし、大筋においては大同小異ともいいうるので、ここでは一九八八（昭和六三）年度の一部在のそれのみを記載しておきたい。[32]

行事	新暦（月日）	旧暦（月日）
一、御前様参詣	一・一	

二、お開き・餅ならし　一・二
三、ごじんきん（家払い）　一・四
四、悲しみの入り　二・三　一二・一六
五、悲しみの中御恩礼　三・六　一・一八
六、花参り　三・一三　一・二五
七、上がり　三・二〇　二・三
八、お世上祭（せじょう）　三・二五　二・八
九、四〇日目　四・二八　三・一三
一〇、一〇日目　五・七　三・二二
一一、三日目　五・九　三・二四
一二、田祈禱　六月中旬まで
一三、土用中様　七・二七　六・一四
一四、御願立て・御願成就　七・三一　六・一八
一五、じびりあ様　八・二八　七・一七
一六、御屋敷様　一〇・九　八・二九
一七、御科払い（おとがおとぼらい）　一〇・二三　九・一三
一八、お産待ち　一二・一七　一一・九
一九、お誕生　一二・一八　一一・一〇
二〇、エステワン様　一二・一九　一一・一一

二一、ジワン様　一二・二〇　一一・一二
二二、子供の祝い日　一二・二一　一一・一三
二三、ドメイゴ祝い日　一二・二五　一一・一七
二四、御そびよう様　一二・三〇　一一・二三
二五、茶屋のジサンバンバの日　旧一〇月八日～一〇月一一日までの間

右に記した年中行事のほとんどは、「つもと」つまり納戸神、御前様を祀る御番役宅で行なわれ、主として組の代表者である「み弟子」が参加する。行事のそれぞれについてはすでに多くの説明がなされている[33]ので、ここではそのいくつかについて簡単な説明を加えるにとどめたい。

一、御前様参詣はいわゆる新年の初詣でである。これには「垣内」の一般キリシタンが参詣するが、組に所属していない非キリシタン（かってはキリシタンであったと思われる）の参詣者もかなりの数にのぼっている。二、のお開きは御前様に供えた「おすわり」（鏡餅）を切り、み弟子に配る日である。み弟子は自らの組の各家にその餅を再分配しなければならない。3、ごじんきんは他地区では「家払い」と呼ばれ、お授け役が各家を巡回して、中江ノ島で汲みとった聖水「サン・ジワン様」で祓い清める行事であり、一年の厄払いと家内安全を祈願する。

四、悲しみの入りは、文字通りキリストの受難の節への入りである。六、は「枝の主日」であり、七、上りは「復活主日」、八、お世上祭は「聖体行列」のことだという。九、四〇日目はキリスト昇天の祝日、一〇日目は聖霊降臨の日である。これらはカトリックの祝日に由来しているといえよう。一二、田祈禱では豊かな稔りと風虫害の被害のなきようにと祈願する。一三、土用中様は本来的にはつもとの御前様を天日に曝し、御番役が御前様の御堂を清掃する日である。この日、役中が集参して暦年後半部の行事の日取りを決める。一四、御願立て・御願成就は、今年度の

豊作祈願をなし、前年度の願立てが成就したことを感謝する。一五、じびりあ様はキリシタンの「お盆」と考えており、一七、お科払いも同じく祖先供養とされている。一八、お産待ちはクリスマス・イブで安産祈願をなし、一九、お誕生はクリスマスでキリストの誕生を祝う。二〇、エステワン様、二一、ジワン様はともに生月の殉教者の命日である。二五、はキリシタンであった茶屋のジサン（爺さん）バンバ（婆さん）が密偵に捕えられ処刑された命日であるという。

これらの諸行事のほとんどは「つもと」行事であり、つもとに役中が集参して御前様にオラショを奉唱する。しかし、四、悲しみの入り、六、花参り、七、上がり、一五、じびりあ様、一七、御科払いは組単位で行なわれる。組所属世帯のみによる今一つの行事に「お札」がある。原則的には月に一度というが、現実には二月に一度、ところによっては年に四度である。み弟子宅に集り、男女二組からなる一六枚の木札をひくのである。み弟子（またはオラショ奉唱のできる人）が「ロッカン」を唱え、出席者がその家族全員の木札をひき、吉凶を占うのである。

すでにのべたように、右にあげた以外にも生月にはダンジク様、サン・パブロー様、アントウ様、ガスパル様、八体様、千人松等々といった、殉教者と関連づけられた聖地が多く点在する。かれらキリシタンにとり、これらを祀る行事も欠かすことはできない。

ともかく、生月におけるキリシタンのつもとおよび組による年中行事をみると、その数の多さに驚ろきを禁じえない。まさに、文字通りの儀礼中心主義といっても決して過言ではないであろう。しかも、そのほとんどについての詳細な由来もまた意義も充分な理解のないままに、ただひたすら納戸神、御前様にオラショを奉唱する。そして、このつもと行事には必ず酒食がともなうのである。かかる行事に際して宴席を設けるのは、役人の監視の目を避けたというかっての方策の名残りである、との説明もある。従来は、もっと盛大に行っていたが、経費の関係で近年かなり簡略化されたという。しかしながら、観察者であるわれわれからすれば、それでもなお相当の経費が必要であろうこと

が感じられ、キリシタン衰退の遠因の一つにこの経費問題がひそんでいるのではないか、との印象をうけざるをえなかったほどである。

つもと行事そして組行事と生月キリシタンには驚ろくほど数多くの儀礼的実践がみられる反面、キリシタン信仰の教義的側面についての知的理解はいちじるしく浅いといわざるを得ない。指導的地位にある役職者の一部が諸行事について若干の説明をなしうるとしても、一般のキリシタン信徒はほとんど何も知らないというのが現実である。もっとも、かれらの間に明確な教義体系が確立しているわけではない。よくいわれるように、キリシタン信仰はシンクレティズムである。カトリシズム、仏教、神道そして民間信仰が幾重にも混り合い、呪術的要素もかなり多く見出されるなど、明確なかたちでのカトリシズムが温存されているわけでは決してない。[34] かれらの最高指導者の一人、あるお授け役ですら、われわれが贈った『どちりな・きりしたん』（岩波文庫版）を読み、いくらか教義的なものを理解することができた、と語っていたことからも、容易にその度合いを理解することができるであろう。ともあれ、長期にわたる諸宗教の混淆として、キリスト教系、神道系その他に由来する神々の多神教、無病息災や家内安全それに農事と強い関連をもつ現世利益、加えて祖先崇拝が、今日の生月キリシタンの諸行事から推定されうる、キリシタン信仰の中核的なものとみなしても大きな間違いはなさそうである。

むすびにかえて

われわれは生月キリシタンの若干の側面にみられる最近の動向を観察してきた。生月においては、一方では、納戸神、御前様といった宗教的シンボル群を中核に、免＝触という地縁的社会構造とも密接に結合した、お授け役－つもと（御番役）－組（コンパンヤ）からなる祭祀組織が構築されている。もちろん、この組所属世帯の減少傾向は否定できないが、今日、依然として頻繁な年中行事をとり行うなど、かなり強固に機能しているすがたをみることができ

たのである。

しかしながら、他方、個人レベルにおけるお水授け（洗礼）あるいはオラショ奉唱の習得に関する限り、先行研究を欠くゆえに正確な対比はできないが、往時に比して衰退の度合いはいちじるしい。とりわけ、高齢者層と若年齢層との間には大きなそして明白なギャップが存していることも否定できない事実である。この二つのインデックスで示される限り、このキリシタン集団における個々の信仰の強度はかなり低くなっており、したがって、次世代層に対する信仰の伝達、継承もいたって困難な状況にさしかかっていると断定せざるをえない。われわれが数度にわたって参与観察を試みた諸行事にしても、それへの参加者はほとんどが世帯を代表する高齢者をみるのみである。端的な表現が許されるならば、生月キリシタンにおける外的形式的側面には依然強固なものがあるとしても、実質的内面にはかなりの衰退を認めなければならないであろう。

このことは、キリシタンの宗教体系がもはやカトリシズムがそうであるような個人の霊魂の救済宗教ではなく、むしろ「家」を単位とした構造に変様しているということであり、さらにこのことは加速されていくであろうと思われる。それはまさに、日本仏教に特徴的な寺＝檀家制にも擬せられるすがたということができる。いみじくも、ある御番役が「正月の御前様参詣には檀家のみでなく、それ以外の人も多数参詣にくる」と、その垣内のことを「檀家」と呼んでいたのは示唆的である。あたかも生月に残った者の誰かが財産・家督を相続すると同じように、キリシタン世帯、キリシタンの「家」を継ぐというかたちでの組織所属の継承が実情といえよう。この場合、個人の信仰にもとづく洗礼の有無やオラショ奉唱の可否は、それほど大きな意義を有しなくなっているのではないか、とも推察される。それゆえにこそ、お水授けを受けた者やオラショ奉唱者のきわ立った減少があるにもかかわらず、祭祀組織それ自体の存続率は意外に高く、かなりの強さを保持しながら機能しているといえよう。

たしかに、生月キリシタンをめぐる客観的状況は、かれらに有利に展開しているとは思われない。かれらの存続を

おびやかす外的圧力の強力なことも否定できない。すでに明らかにしたように、主として農業集落の在に居住するキリシタン家族の大部分は兼業農家である。近年の農業の不振は、とりわけこれらキリシタン農家の若年層を直撃し、就業先を求めて都市へと向かわせている。生月における農業就業人口の急激な減少はこの事実と関連しているのである。たとえかれらが生月に残ったとしても、まき網漁船の乗組員として一年の大半は船上生活を強いられるし、土木工事作業員や杜氏としての出稼ぎなどで長期にわたり生月を不在にする機会が多い。これに加えて、信仰体系の不明確さとオラショ習得の困難さと忍耐とは、こうした人々がキリシタンの宗教体系を敬遠する大きな理由ともなっている。さらには、行事、儀礼が主体であるこの宗教体系は、生月の地をはなれてはまったく機能することができない。生月の宗教的風土および地縁社会と密接に結合した、まさに限定された一地域のみに展開する「地域宗教」(regional religion) にほかならないからである。

さらに、この客観的状況ないし外的圧力の今一つの影響として、多分に間接的ともいえようが、キリシタンの内的側面からの動きにマイナスの作用いわば弱体化の傾向を生ぜしめていることが注目される。今日の生月キリシタンの大半の親そして指導者は、かって死を賭して信仰を守り通した殉教者の血を受け継ぎながらも、このような現実にもはや果敢に抗することなく、例外的な一部の指導者層を除くと、決してキリシタニズムの推進者とはいいえないことである。あえていえば、自らの代だけは何とかしてそれを保ちたいという、いたって消極的姿勢であるにすぎない。むしろ、存続への意欲を喪失した「あきらめ」にも似た感情を有している。「自分たちが死ねば、キリシタンも終りになるだろう」と。それゆえに、後継者たる次世代に対する積極的な宗教的社会化の試みはほとんどみることができない。その結果が、お水授けをうけオラショ習得を志願する若者が皆無に近いというすがたなのである。

しかしながら、生月の各地にはキリシタン殉教者ゆかりの聖地が点在し、納戸神の崇拝者の群はひろい裾野を形成[35]しているなど、依然としてキリシタニズムの雰囲気が充満するキリシタンの島であることもまた事実である。ところ

で、今後どのような動向が推察されるのであろうか。果して古老のいうように、かれらの世代で終焉を迎えるというのであろうか。われわれは性急な将来の予測に慎重でなければならないが、とくに祭祀組織に関する側面の観察から、次のように語ることは許されるであろう。

組織を変革した堺目における準会員の在り方は確かに示唆的である。かれらは組を離脱し祭祀組織それ自体に所属していないとはいえ、依然としてつもととは結合し、キリシタンの儀礼的慣行を維持している。これも一つの存続の方向であろう。とはいえ、われわれがみてきたように、キリシタンの祭祀組織は苦難の連続であった過去数百年にわたり綿々と存続してきており、いとも簡単に崩壊し去るとは考えられない。この組織は地縁的社会構造と密接に結合し、長年にわたって親愛の情をもって崇拝してきた納戸神、御前様を中核としている。しかし、その現実のすがたが従来のそれと比して何らかの変化と刷新をみせることは必至と思われる。すでに観察されたところでもあるが、たとえその所属世帯成員が誰一人としてお水授けをうけておらず、またオラショ奉唱ができないとしても、それらをキリシタン世帯としてその所属を容認していくであろう。そして、納戸神、御前様という宗教的シンボル群をめぐり、無病息災・家内安全・それに農事と関連した現世利益、祖先崇拝を主目的とした多神教的儀礼中心主義の形態をとりながら、生月キリシタニズムは今後もなお相当の期間存続し、かつ機能していくことであろうと推測されるのである。

註

(1) George Elison, *Deus Destroyed: The Image of Christianity in Early Modern Japan*, Council on East Asian Studies Harvard University, Harvard University Press, 1988, 222f.

(2) 浦川和三郎著『切支丹の復活』（国書刊行会、昭和五四年、初版昭和二年）。とくにプティジャン神父による浦上キリシタン信徒発見の描写は印象的である。なお、プティジャン神父がこのことを横浜の日本教区長ジラール神父に伝えた書簡は『プティジャン司教書簡集』（純心女子短期大学・長崎地方文化史研究所編、一九八六年）六六頁以下に山田雅子訳で収録さ

れている。

(3) 古野清人著『隠れキリシタン』（至文堂、昭和三四年）四三頁。
(4) 古野清人「生月キリシタン部落ー特にその祭祀組織について」『九州大学九州文化史研究所紀要』第五号（昭和三一年）。
(5) 長崎県北松浦郡生月町編『いきつき、一九八八町勢要覧』をはじめとする生月町役場資料による。
(6) 河野純徳訳『聖フランシスコ　ザビエル全書簡』（平凡社、昭和六〇年）五二七頁。
(7) 村上直次郎訳・柳谷武夫編輯『イエズス会士日本通信　上』（雄松堂、昭和四三年）五八頁。
(8) 前掲書　一八六ー七頁。
(9) 前掲書　二一一頁。
(10) 前掲書　三〇八ー九頁。
(11) ルイス・フロイス　柳谷武夫訳『日本史ーキリシタン伝来のころー』2（平凡社、昭和五三年）一九七頁。
(12) 村上直次郎訳・柳谷武夫編輯『イエズス会日本年報　上』（雄松堂、昭和四四年）四六頁。
(13) 田北耕也著『昭和時代の潜伏キリシタン』（日本学術振興会、昭和二九年）二五四頁。
(14) 近藤儀左衛門著『生月史稿』（芸文堂、昭和五二年）九九頁以下。
(15) 『イエズス会日本年報　上』二四〇頁。
(16) 村上直次郎訳「イエズス会年報」キリシタン文化研究会編『キリシタン研究』第十二輯（吉川弘文館、昭和四二年）一二七ー八頁。
(17) レオン・パジェス　吉田小五郎訳『日本切支丹宗門史』上、（岩波書店、昭和三五年、初版昭和一三年）二八ー九頁。
(18) 前掲書　二三二ー四頁。ガスパル西玄可をはじめとする西一族については、チースリク氏の研究がある（Hubert Chieslik S.J.「殉教者一族・生月の西家」『キリシタン研究』第二三輯、吉川弘文館、昭和五六年、八九頁以下）。
(19) レオン・パジェス、前掲書、中、二〇八ー九頁。
(20) 前掲書、中、三三〇ー二頁。
(21) 生月山田のキリシタンに伝えられている「御中江さんじゅうわん様御歌」を記しておく（村尾律雄氏ノートより）。

んー前わな前わ泉水やなあーあ
後わな高き岩なるやあーなあーあ

前もな後も潮であかするやあなあーあ
んー此の春わなあー
桜な花かや散るじるやなああー
また来る春わなつぼむ開くる
花であるぞやなあーあ

(22) 生月山田にはダンジク様の御歌といわれる「地獄様」も伝えられている。村尾氏のノートにしたがって記しておく。

んー参ろやな参ろやな
ぱらいぞの寺にぞ参ろやなあーあ
ぱらいぞの寺とわ申するやなあーあ
広いな寺とは申するやなあーあ
広いなせばいわ我が胸にあるぞやなあーあ
んー柴田山　柴田山　今わな涙の先なるやなあー
先わな助かる道であるぞやなあーあ

「さんじゅうわん様御歌」もこの「地獄様」もともにいたって素朴ではあるが、殉教者の悲しみとせつせつと訴える希望を偲ばせ、聴く者の心を打つ歌である。

(23) 古野清人著、前掲書　二四一頁以下。

かくれキリシタンにみられるシンクレティズムの一、二の事例をあげておこう。

(一)、かれらのオラショは「神寄せ」からはじまるが、その中には次のごときまさに多神教的すがたが観察される。

三方大皇神様　伊勢神宮様　先祖様　ハジメタテマツル　ワレラガデーウス　サンタクロスノオンシルシヲモッテ　ワレラガオンナジデーウス　テキヲノガセタモウ　デウスパーテロヒリヨスベリトサンタノミナヲモツッテオオガミタノミタテマツル（村尾律雄氏ノートより）

(二)、かれらは当然仏教徒でもあるので、仏壇を新規に購入することがしばしばみられる。その際に役職者が次のような御誦詞を唱え「仏壇の魂入れ」を行うのである。

「何が」と申する者が新作仕につきまして御向（お中江か）へサンジュワン様の御聖水をもって仏壇の魂入れの御祈禱をいたします。

頓死凍病いき合い致しません様に我等がデウスに頼み奉る。アンメージゾウー

また、次のように祈願することもある。

ドメゴースと申する者が仏壇の新作仕につきまして御向サンジュワン様の御水をもって仏壇の魂入れをいたします。○○家の先祖代々の御霊が新御仏壇にお移りいただき先祖様の安らかな御冥福をお祈りいたします。願くば○○家の御繁栄と併せて御家族御一統の御多幸を我等がデウスに念じ奉る。アンメージゾウー（大畑博氏ノートより）

(24) 「戻し」に際しての御誦詞は次のごとくである。

（故人の名）と申する者が御葬々につきまして世界では悪人なれ共、善人におもり返へなされまして御前の上の御なる様に頼み奉るアンメジゾウー

（故人の名）と申する者が御葬々につきまして御コンタツ様を御迎へ申していただかせまするは今ばかり天狗岳もかけ申さんように火の山もお除けなされかの山も御除けなされまして新しや棺に仕込んですぐに参れや天のパライゾー（三回くり返し）

パライゾーと申するものは地獄の上の天のことなりやアンメジゾウー（大畑博氏ノートより）

なお、田北氏は「もどし」について、カトリック教会における「終油の秘蹟」との関連を示唆している（前掲書、四七八頁以下）。

(25) 生月と同系統のキリシタン村落、平戸市根獅子においては納戸神を「辻本さま」という。牧正美氏は「辻本とは厨子は一般在家に見られる厨子とは異なった本格的な造営物であったから、一般在家にも厨子が安置されるようになると、それらと区別されるためには辻本厨子と呼ばれた」との森岡清美氏の考察（「ある辻本の記録」『真宗史の研究』）にもとづき、根獅子の辻本と同じ宗教組織上の位置にある生月の「つもと」が、「つじもと」の短略化された語ではないかと推察している（「キリシタン村落根獅子の宗教と社会ー「納戸神」信仰の社会学的考察ー」『哲学年報』第三一輯、昭和四七年、一三一頁）。この「つもと」名称の起源説は一考に値すると思われる。

(26) 「組」（コンパンヤ）の起源に関しては、次のような説がみられる。片岡弥吉氏は「五人組の名残りではないかとも思われるけれども、根獅子慈悲仲間という名から想定すると、キリシタンの『組』の下部組織に由来するかもしれない」という（『かくれキリシタンー歴史と民俗』日本放送出版協会、昭和四二年、一一二頁）。また、田北耕也氏も「コンパンヤはコンフラリヤ(confraria) 即ち講社で、ロザリヨの組に起源するものと思われるが、生月で聞く音はポルトガル語の companhia に近い。イエズス会のことをコンパニヤと云ったのが耳に親しいので、この方が残ったのだろう」とキリシタン起源説をとる（前掲書、二

五六頁)。これに対して、柴田実氏は生月キリシタンの祭祀組織が宮座に酷似しているとして、「つもとは当屋に当り、コンパンヤは座であるとすれば御弟子衆はおとな衆に外ならぬのではなかろうか。さすれば、コンパニヤの名を除いては殆どキリシタンとしての特色を有せず、むしろわが国固有の習俗にもとづくものであると解せられる」との主張をしている(京都大学平戸学術調査団『平戸学術調査報告』一九五〇年、一六三―四頁)。

(27) 田北耕也著　前掲書　二五七―八頁。

(28) 古野清人　前掲論文　二九頁以下。

(29) 前掲論文　三三頁。

(30) 生月キリシタンにおいては「教籍簿」あるいは「洗礼記録」のごときはまったく存在しない。

(31) たとえば、里元触の大畑博氏を中心に「生月里おらしょ保存会」が一九八七(昭和六二)年に結成されている。

(32) 一部在のお授け役で御番役の大岡留一氏の教示による。

(33) たとえば、田北耕也著　前掲書　二八三頁以下、古野清人著　前掲書　一五四―六二頁、片岡弥吉著　前掲書　一九二―七頁など。

(34) 古野清人氏は、かかるすがたを示しているキリシタンの宗教体系を、「キリシタニズム」と呼ぶのが最も適当であるという(前掲書　二四一頁以下。注(23)参照のこと)。

(35) 生月にはキリシタニズムと関連する習俗が多々存在している。すでにのべた殉教者とかかわる聖地は、豊作豊漁、安産、家内安全、無病息災を祈願する場でもある。新造船の入魂はしばしば中江ノ島で、あるいはサンジュワン様の聖水を用いて行なわれる。十字形に切った小紙片の「オマブリ」や聖水は、家払い、虫払い、家内安全、安産祈願あるいは病気治療などに際して、呪術的目的に用いられることが多くみられる。

付記　生月キリシタン調査に際して、実に多くの方々のご指導ご協力をいただいた。なかでも、九州大学文学部中村質教授、純心女子短大宮崎賢太郎助教授、生月町石田安一町長はじめ役場、教育委員会の方々、キリシタンの役職である大岡留一、大畑博、村尾律雄、故未永武男の諸氏には深甚なる感謝を申し上げたい。また、調査に同行して協力を惜しまなかった、九大文学部宗教学研究室の諸君の労に対しても謝意を表する次第である。